

幼児における日付けや季節に関する言葉の理解

—— カレンダー・季節・年中行事の知識を対象として ——

山本 瑠璃子*・大伴 潔**

(2021年11月25日受理)

YAMAMOTO, R. and OTOMO, K.; Understanding Words for Dates and Seasons in Young Children: *Knowledge of Calendar, Seasons, and Annual Events*. ISSN 1349-9580

We investigated children's understanding of words related to the day of the week, calendar, seasons, and year-round events. Day of the week tasks, calendar tasks, seasonal tasks, and year-round event tasks were administered to 5- and 6-year-old children to examine their understanding of conventional time concepts. A survey was also conducted to parents to examine how children's understanding of those words was related to their home environment. Results showed that 6-year-olds tended to demonstrate greater knowledge than 5-year-olds, suggesting that children's daily activities in kindergartens, schools, and home promoted the acquisition of words and conventional concepts related to calendar. The percentages of correct answers for "the day after tomorrow" and "the day before yesterday" were found to be lower than those for more frequently used "yesterday" and "tomorrow," indicating that the understanding of words that are farther apart in time lagged behind the words closer in time. Accuracies for weeks, i.e. "this week," "next week," and "last week," were also relatively low. Familiarities of certain seasons and annual events were also noted in the tasks. The number of correct answers for the day of the week task was shown to correlate with parental use, suggesting the positive influence of the family environment. The importance of understanding of circularity of the calendar and seasons is also discussed.

KEY WORDS : Calendar, Dates, Seasons, Words, Children

* LITALICO Co.Ltd., Tokyo

** Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University

1. はじめに

週の中で曜日による活動の変化がある保育所や幼稚園で過ごす幼児にとって「きのう」「きょう」「あした」などのカレンダーにかかわる言葉と接する機会は多い。特に予定の確認や過去のことを他者に語る場面において求められる。日本語マッカーサー乳幼児発達質問紙の開発研究¹⁾によると、「きのう」「きょう」「あした」「朝」「昼」「夜」「さつき」「今」などの時間を表す言葉は36カ月ま

で60%の子どもが表出するとされている。しかし、これらの言葉を幼児が誤用している場面もしばしば見られる。例えば過去のことであればすべて「きのう」を用いるなど、表出される時間を表す言葉の理解や時間の概念の理解が必ずしも正確であるとは言えない。

自然で社会的なサイクルをもつ時間についての概念を慣用的時間概念と呼ぶことがある²⁾。私たちが日常生活において見通しをもって行動したり、スケジュールを管理したりするために重要な概念である。幼児においては、

* 株式会社 LITALICO

** 東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター

武藤³⁾が幼児の生活時間の構造と日常生活の出来事の順序性と循環性について検討しているが、週・月・年などの大きな時間概念への発展については先行研究で明らかになっていない。また、竹内・丸山²⁾が指摘しているように、曜日などに関しては文化的な認識の違いもあるため、Friedman⁴⁾など海外の先行研究の結果と日本の先行研究の結果には相違があると考えられる。

時間や年中行事、季節に関しては、小学校学習指導要領⁵⁾、特別支援学校学習指導要領⁶⁾にも様々な教科にわたって記述がある。例えば、小学校学習指導要領第5節生活の第2内容には「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関ったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活が変わることに気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする」とある。特別支援学校学習指導要領の小学部・生活の内容にも第2段階、第3段階に季節の四季の変化についての記載がある。このように、学校生活を行う上でも季節は重要な概念として位置付けられている。日付や曜日、週、月、年の理解についても曜日ごとに時間割を見て持ち物を準備したり、学校行事の予定の把握をしたり、小学校に入学後の初期から必要になってくる。そのため小学校入学前の幼児期における時間を表す言葉や慣用的時間概念の理解の程度を知ることは幼小接続の観点でも重要である。

そこで本研究では、複数の課題を通して幼児の曜日、カレンダー、季節、年中行事に関する言葉の理解、慣用的時間概念の理解について明らかにすることを目的とした。また、保護者アンケートを通して、幼児の時間を表す言葉と慣用的時間概念の理解が日常での生活経験とどのように関連しているのかについても検討を行った。

2. 方法

2. 1 研究参加児

5-6歳の幼児、児童及びその保護者を対象とした。5歳児は幼稚園に通う7名(男児3名, 女児4名), 平均年齢5歳6か月(5;1~5;11), 6歳児は小学校1年生である8名(男児4名, 女児4名), 平均年齢6歳9か月(6;8~6;10)であった。5歳児群の絵画語い発達検査(PVT-R)による平均語彙年齢は6歳6か月(5;0~9;0), 6歳児群は7歳11か月(6;8~12;1)であった。研究参加児の保護者には文書及び口頭にて研究の目的と方法を説明し、同意を得た。

2. 2 課題

本研究では、曜日の知識を問う課題、カレンダーの理解を問う課題、季節の知識を問う課題、年中行事の知識を問う課題の4課題を行った。

(1) 曜日課題

「曜日を知っていますか」と尋ね、返答がない場合は、曜日をいくつか例示して、これから曜日についての質問をすることを伝えた。その後、週や曜日に関する以下の質問に口頭で答えてもらった。

- a. 1週間は何日ありますか。
- b. 月曜日の次の日は何曜日ですか。
- c. 金曜日の次の日は何曜日ですか。
- d. 日曜日の次の日は何曜日ですか。
- e. 木曜日の前の日は何曜日ですか。
- f. 月曜日の前の日は何曜日ですか。
- g. 水曜日から順番に曜日を教えてください。

(2) カレンダー課題

2020年9月のカレンダーを対象者に提示した。このカレンダーは課題用に作成したものであり、8月30日から10月3日までが記載されている。日曜始まりの形式をとっており、土曜日の日付は赤字で日曜日の日付は青字に色付けした。問題a~1では、質問に対してカレンダー上を指差して答えてもらい、問題m~qについてはカレンダーを提示した状態で行った質問に対して口頭で答えてもらった。また問題b~hについては、問題aの正解が分からない場合には答えられないため、問題aが無回答や不正解だった場合は、カレンダー上を指さし、日付を確認してから問題bに進むこととした。きょうの位置を確認できる目印をカレンダー上に置いた上で質問した。問題fについては、その日を含む1週間(7日間)をカレンダー上で指さすことができれば正解とした。また月曜からの1週間を指さした場合も正解とした。問題gとhについても、適切な範囲を指さすことができれば正答とした。問題p, qは「曜日の課題」の問題a, gが正解の場合は行わず正解とした。

- a. きょうは9月16日です。9月16日を指さしてください。
- b. きょうはどこですか。指さしてください。
- c. あしたはどこですか。指さしてください。
- d. おとといはどこですか。指さしてください。
- e. あさってはどこですか。指さしてください。
- f. 今週という言葉は聞いたことがありますか。今週はどこからどこまでですか。指さして教えてください。
- g. 来週という言葉は聞いたことがありますか。来週はどこからどこまでですか。指さして教えてください。
- h. 先週という言葉は聞いたことがありますか。先週はどこ

からどこまでですか。指さして教えてください。

- i. 9月1日はどこですか。指さしてください。
- j. 9月24日はどこですか。指さしてください。
- k. 8月31日はどこですか。指さしてください。
- l. 10月2日はどこですか。指さしてください。
- m. 9月22日は何曜日ですか。
- n. 9月5日は何曜日ですか。
- o. 9月27日は何曜日ですか。
- p. 一週間は何日ありますか。
- q. 水曜日から順番に曜日を言ってください。

(3) 季節課題

1) 季節に関する語の想起

制限時間30秒間を設けて、4つの季節に関して想起される言葉をできるだけ多く答えてもらった。

- a. 夏と言えばプールなどが思い浮かぶと思います。ほかには夏といえばどんなものがありますか。できるだけたくさん教えてください。
- b. 春と言えばお花見などが思い浮かぶと思います。ほかには春と言えばどんなものがありますか。できるだけたくさん教えてください。
- c. 冬と言えば雪などが思い浮かぶと思います。ほかには冬と言えばどんなものがありますか。できるだけたくさん教えてください。
- d. 秋と言えば紅葉などが思い浮かぶと思います。ほかには秋と言えばどんなものがありますか。できるだけたくさん教えてください。

2) 季節のイラスト課題

4つの季節の気候や植物などが描かれたイラストカードを提示して、そのカードの季節を答えてもらった。「春」のカードでは満開の桜並木とともに、その下でお花見をする人物が描かれ、「夏」は、海と入道雲、海辺でスイカわりをしている人物、「秋」は紅葉しているモミジの木の下で読書をしている人物と赤とんぼ、「冬」は雪が降っている様子と雪だるまを作っているマフラーを巻いた人物の様子が描かれている。その後、イラストカードを季節の順に並び替えてもらった。イラストカードの並び替え問題は秋のカードを先頭に残りの3枚のカードを並べるように指示を出すものとした。

(4) 年中行事課題

幼児、児童に親しみのある年中行事（お正月、節分、ひな祭り、子どもの日、七夕、クリスマス）に関するイラストカードを見せて、それぞれの①行事名、②行事の内容、③その行事がいつ行われるかを口頭で解答するものとした。①の問題が答えられない場合は正答を伝えてから②③の問題に移った。最後にイラストカードの行事の

順番の並び替え課題を行った。並び替えはイラストカード「お正月」を先頭に提示し、残りの5枚のイラストカードを順番に並べるように指示した。

- a. イラストカード七夕を対象者の前に提示する。
 - a-1. これは何の絵ですか
 - a-2. 七夕はどんなことをしますか
 - a-3. 七夕はいつですか
 以降の語句にも同様の質問を行った。
- b. ひなまつり
- c. お正月
- d. クリスマス
- e. 子どもの日
- f. 節分
- g. イラストカードお正月を提示し「このカードを1番初めにして、行事を順番に並べてください」と指示を出す。

〈正答と採点の基準〉

- a-1. 七夕
- a-2. 正答例（なりたいもの、願い事を短冊にかく。お願い事をする。笹を飾る。）
- a-3. 1月（1月1日、1月のはじめ、1年のはじめなど）
- b-1. ひなまつり、桃の節句
- b-2. 正答例（雛人形を飾る。ひなあられを食べる。ちらし寿司を食べる。女の子の成長を祝う。）
- b-3. 3月3日（3月）
- c-1. お正月、正月
- c-2. 正答例（おせちを食べる。初詣に行く。お年玉をもらう。）
- c-3. 1月（1月1日、1月のはじめ、1年のはじめなど）
- d-1. クリスマス
- d-2. 正答例（プレゼントをもらう。サンタさんが来る。パーティーをする。ごちそうを食べる。）
- d-3. 12月25日（12月、12月24日）
- e-1. こどもの日、端午の節句
- e-2. 正答例（こいのぼりを飾る。兜を飾る。柏餅を食べる。）
- e-3. 5月5日（5月）
- f-1. 節分
- f-2. 正答例（豆をまく。恵方巻を食べる。豆を食べる。）
- f-3. 2月（2月3日、2月2日、2月）
- g. お正月、節分、ひなまつり、子どもの日、七夕、クリスマス

2. 3 保護者へのアンケート調査

保護者を対象に以下のようなアンケートに選択式及び記述式で回答してもらった。

① 家庭環境についての質問

- a. 子どもと会話の中で曜日用いることはあるか。用いる場合、その使用場面。
- b. 子どもに対して「月曜日の次は火曜日だね」「きょうは火曜日だからあしたは水曜日だよ」など「月、火、水、

木、金、土、日」の曜日の順序について教えた経験があるか。

- c. 家庭で子どもの見える範囲にカレンダーはあるか。
- d. 子どもとのスケジュール管理や予定の確認などで、カレンダーを使用した経験はあるか。ある場合、その使用場面。
- e. 子どもに対して「きのう」「きょう」「あした」などの言葉を使用するか。
- f. 子どもに対して「あさって」「おととい」などの言葉を使用するか。
- g. 子どもに対して「今週」「来週」「先週」などの言葉を使用するか。

② 子どもの言葉使用について

- h. 会話の中で子ども自身が曜日を使用することはあるか。使う場合、その使用場面。
- i. 会話の中で子ども自身の「きのう」「きょう」「あした」などの言葉を使用するか。
- j. 会話の中で子ども自身の「あさって」「おととい」などの言葉を使用するか。
- k. 会話の中で子ども自身の「今週」「来週」「先週」などの言葉を使用するか。

③ 季節の行事等についての質問

- l. 家庭において以下の行事の際、家で飾りつけをしたり、家族で楽しんだりすることがあるか：お正月、節分、ひなまつり、こどもの日、七夕、クリスマス
- m. 子どもの通っている幼稚園、保育園で、上記の6つの行事について、飾りつけをしたり、友達と楽しんだりするようなことはあるか。

3. 結果

3. 1 課題ごとの正答率

(1) 曜日課題

すべての問題で5歳児の正答率が6歳児の正答率が上回った(図1)。5歳児、6歳児ともに問題a「1週間は何日か」で最も正答率が低かった。5歳児、6歳児ともに指定された曜日の「次の日」の曜日を答える問題(b~d)の正答率は、「前の日」の曜日を答える問題(e, f)の正答率より高かった。しかし、Mann-WhitneyのU検定では5歳児と6歳児の課題結果について有意差は認められなかった。

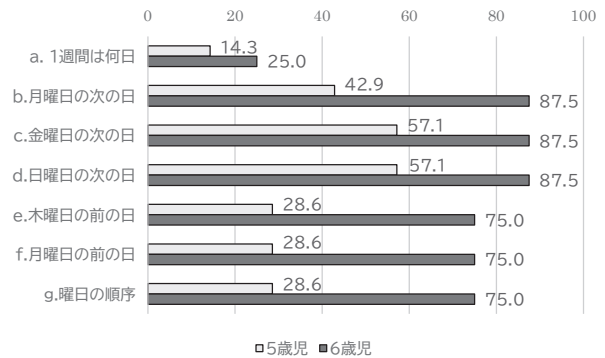


図1 曜日課題の年齢別平均正答率

(2) カレンダー課題

「きのう」「あした」は6歳児で100%、5歳児で71.4%と高い正答率だったが、「あさって」では5歳児が57.1%、6歳児が87.5%、さらに「おととい」では5歳児が28.6%、6歳児が67.5%と正答率は下がっていった(図2)。

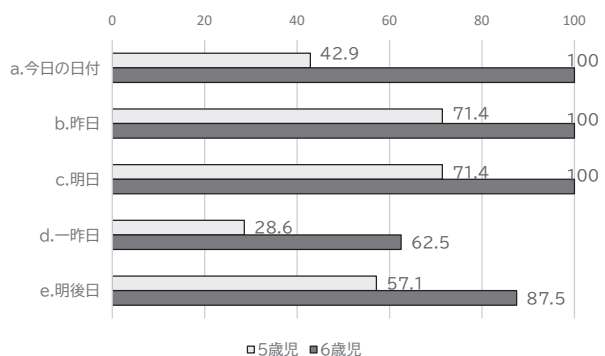


図2 カレンダー課題の年齢別平均正答率

カレンダー上での週の位置を尋ねた問題(f~h)の正答率は低く、「今週」「先週」は5歳児、6歳児ともに正答者なし、「来週」でも5歳児で14.3%、6歳児で25%という正答率であった。

日付の位置の指差しを行った問題(i~l)では5歳児、6歳児ともに9月の範囲の前後である「8月31日」「10月2日」の正答率が低く、6歳児では正答率37.5%、5歳児では正答者はいなかった(図3)。

5歳児のと6歳児の課題結果について検討するためにMann-WhitneyのU検定を実施したところ、カレンダー課題の正答数において5歳児群と小学校1年生6歳児群との間に1%水準で有意差が認められた。

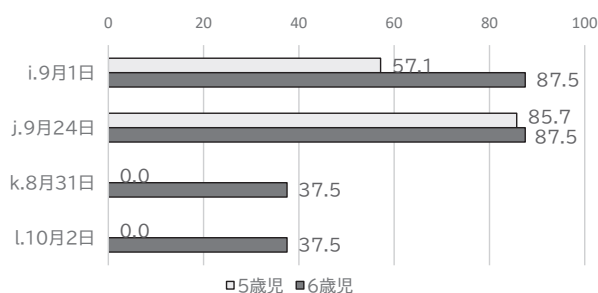


図3 日付に関する課題の年齢別平均正答率

(3) 季節課題

1) 季節に関する語の想起

季節に関する語の想起では5歳児では夏（平均想起語彙数2.14個）、冬（1.42個）、春（1.0個）、秋（0.71個）の順で想起された語が多く、6歳児では冬（2.25個）、夏（2.12個）、秋（1.62個）、春（0.87個）の順で多かった。

2) 季節のイラスト課題

5歳児、6歳児ともに問題「冬」の正答率が最も高くなり、全員が正答した（図4）。「季節の順序」にイラストカードを並び替える問題では5歳児では28.6%、6歳児で62.5%の正答率であった。6歳児においては、言葉の想起とイラストカード課題の2つの課題ともに「春」「秋」よりも「夏」「冬」の正答率が高かった

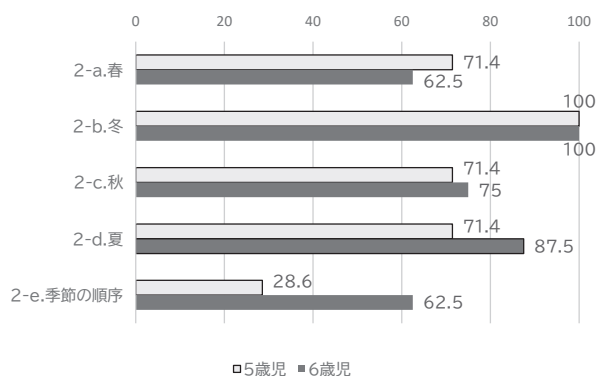


図4 季節課題の年齢別平均正答率

(4) 年中行事課題

年中行事課題の5歳児の正答率と6歳児の正答率を図5に示す。各年中行事の「名称」の中で最も正答率が高かったのは5歳児、6歳児ともに「クリスマス」であった。5歳児ではクリスマスに次いで「ひなまつり」と「節分」が28.6%、「七夕」、「お正月」、「こどもの日」が14.3%となった。6歳児では最も正答率が低かったのは「こどもの日」、「節分」について正答者はいなかった。

年中行事の「内容」においても5歳児、6歳児ともに最も正答率が高かったのは「クリスマス」であり、5歳児

ではクリスマスと同率で「七夕」、「節分」で正答率85.7%であった。最も正答率が低かったのは「ひなまつり」の14.3%であった。6歳児ではクリスマスに続いて正答率が高かったのは「七夕」、「節分」であり、正答率87.5%であった。「ひなまつり」について正答者はいなかった。

年中行事の「時期」においても5歳児、6歳児ともに最も正答率が高かったのは「クリスマス」であった。5歳児では同率で「お正月」の正答率も高く、「節分」について正答者はいなかった。6歳児ではクリスマスに続いて、「お正月」が37.5%、「ひなまつり」が25%、「七夕」、「節分」が12.5%という正答率であった。「こどもの日」について正答者はいなかった。

また6つの年中行事の並び替えを行った問題gでは5歳児が14.3%、6歳児が25%と低い正答率となった。

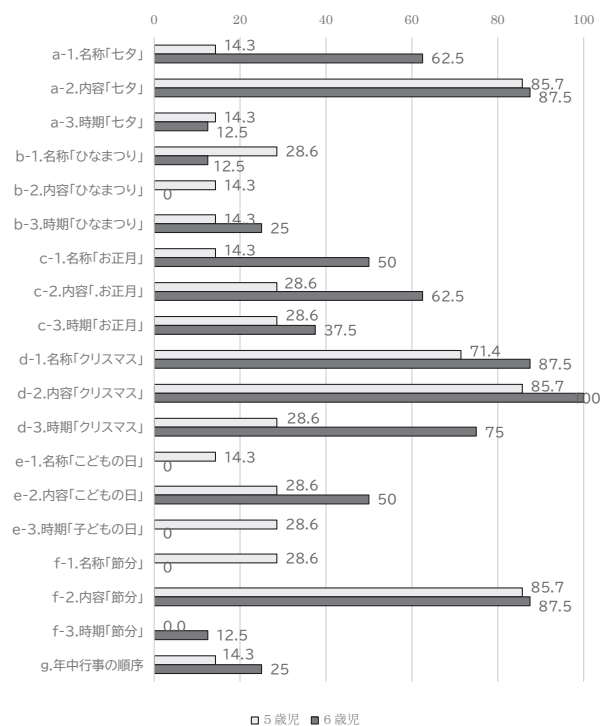


図5 年中行事課題の年齢別平均正答率

3. 2 課題間の相関

参加児の課題ごとの正答数の関連について検討するため、スピアマンの順位相関係数を求めたところ、曜日課題の正答数とカレンダー課題の正答数との間に1%水準で有意な相関が認められた ($p=0.777, p=0.001$)。曜日課題の正答数と年中行事課題の正答数との間にも1%水準の相関 ($p=0.662, p=0.007$)、カレンダー課題の正答数と年中行事課題の正答数との間には5%水準 ($p=0.584, p=0.022$) でそれぞれ有意な相関が認められた。

3. 3 保護者アンケート

家庭環境についての質問では、保護者から子どもへの「きのう・きょう・あした」の使用について尋ねた質問については5歳児と6歳児の保護者全員が「はい（使用がある）」を選択した。家庭でのカレンダーの使用、保護者から子どもへの「あさって・おととい」「今週・来週・先週」の言葉使用については5歳児に比べ6歳児の「はい（使用がある）」を選択した人数が多かった。

子どもの言葉使用については「きのう・きょう・あした」の使用を尋ねた質問については5歳児と6歳児の保護者全員が「はい」を選択した。「今週・来週・先週」の使用を尋ねた質問については5歳児では「はい（使用がある）」を選択した保護者はいなかった。

3. 4 課題の成績と保護者アンケートの結果との関連

保護者アンケートからは、家庭環境合計（保護者アンケート内の家庭環境についての質問項目a～g）の7つの中で保護者が「ある」を選択した数の合計と曜日課題の正答数との間に5%水準で有意な相関が認められ（ $p=0.537, p=0.039$ ）、保護者から子どもに対しての曜日やカレンダーに関する言葉の使用がある家庭ほど子どもの曜日課題の正答数が多いことが示された。

子どもの言葉使用合計（保護者アンケート内の子どもの言葉使用についての質問項目h～k）の4つの中で「ある」を選択した数の合計とカレンダー課題の正答数との間にも5%水準で有意な相関が認められ、（ $p=0.592, p=0.020$ ）、家庭において曜日やカレンダーに関わる言葉の使用がある子どもほど、カレンダー課題の正答数が多いことが示された。

保護者アンケート間では家庭環境合計と子どもの言葉使用合計との間に5%水準で有意な相関が認められ（ $p=0.573, p=0.025$ ）、保護者から子どもに対しての曜日やカレンダーに関する言葉の使用と、子ども自身の曜日やカレンダーに関わる言葉の使用との有意な相関が示された。

4. 考 察

4. 1 曜日・カレンダー・季節・年中行事

(1) 曜日課題

曜日課題ではすべての項目で5歳児の結果を6歳児の結果が上回った。今回、5歳児は未就学児であり、6歳児は小学校1年生を対象とした。このことから、曜日の理解は5歳から6歳にかけて、保育園や幼稚園から小学校生活に移行する中で習得していくことが推測できる。幼児に比べて、学校生活を送る学齢児は時間割や当番など曜日ごとの活動が多い。曜日を使う機会や必要性が増

える過程で曜日の順序や概念を習得していく児童が多いと考えられる。

曜日課題gの水曜日から順番に曜日を答える課題は、曜日の順序の理解を問うと同時に日曜日が終わると再び月曜日が来るという曜日の循環性の理解を探るために設定した。この課題での誤答として、月曜日から曜日を答え始めたり、水曜日から日曜日まで曜日を順番に言えたものの月曜日、火曜日が抜けてしまっていたりということがあった。このことから、月曜日を始まりとして曜日の順序を覚えている幼児、児童が多く、曜日の順序性を理解していても、日曜日が終わるとまた月曜日が来るという循環性までは理解に至っていない幼児、児童の存在が示唆される。曜日という慣用的時間概念においては順序性が循環性よりも早く獲得されると考えられる。また、曜日課題の前後の曜日を答える課題においては、月曜日から順番に曜日を唱えて、回答する様子が見受けられた。このことから、順序性を手がかりに「次の日」には正答することができても、順序をさかのぼることは困難であることが示唆される。数字の順唱よりも逆唱の方が困難であると同様に、この結果はワーキングメモリーの制約が関与していると考えられる。

曜日課題aの1週間は何日あるかという問題の正答率は5歳、6歳ともに曜日課題の中で最も低い結果となった。この年代の幼児、児童は曜日の7つの順序は理解しながらも、1週間が7日間で1周し、再び新たな1週間が始まるという循環性への理解には至っていないと考えられる。同時に曜日と週という概念の関連付けができていないことや曜日1つ1つの名称の獲得と週の概念の習得には差があると考えられる。

(2) カレンダー課題

カレンダー課題において6歳児の正答数が5歳児の結果を有意に上回っており、5歳から6歳にかけて、幼稚園・保育園から小学校に移行する過程で、カレンダーへの理解が進むことが窺える。「きのう」と「あした」、「おととい」と「あさって」、「先週」と「来週」というように過去と未来で対になるような言葉の理解を測ったところ、「きのう」と「あした」の正答率は5歳児、6歳児ともに正答率に差はなく、「きのう」を正答している児は「あした」も正答しているという結果になった。しかし「おととい」と「あさって」では5歳児、6歳児ともに未来を表す「あさって」の正答率が高く、同様に「先週」と「来週」でも未来を表す「来週」の正答率が高くなった。「あさって」「来週」という未来の言葉を理解していても「おととい」「先週」という過去の言葉の理解には至っていない幼児、児童の存在が示された。また、対象者の課題実施中の発言より、「あさってがここだから、

おとといはここかな。」というものがあり、あさってという言葉が「おととい」の正答に導いている例もあった。このことから、未来の時点を表す言葉は先に理解しやすく、そのあとに過去の言葉を理解していくと考えられる。未来の日や週を表すことばは園・学校や家庭において活動の予告を子どもに伝える際に大人が使用する頻度が高いと考えられ、子ども自身も楽しみにしているテレビ番組やイベントを心待ちにするなかで時間的指標を利用している可能性がある。小学校に入学すると、予定の確認やスケジュール管理の場面で「あさって」「来週」などの使用頻度も上がる。5歳児、6歳児はこのような使用場面で未来を表す言葉の理解をしていくと考えられる。一方で、過去の言葉は過去の出来事を語る場面、過去の出来事を他者から聞く場面で使用される。未来を表す言葉は期待感とともに使われることがあり、「あさって」の予定が「あした」になり「きょう」を迎えるという時間的経過を経験しやすいという違いから、過去を表す言葉の理解と未来を表す言葉の理解には差が生まれたのではないかと考えられる。

「きのう」は「きょう」から見ると1日前で、おとといは2日前というように、「おととい」「あさって」は「きのう」「あした」よりもきょうという中心から時間的な距離が離れている。カレンダー課題の結果をみると、「きょう」からの時間的距離が遠い「あさって」、「おととい」は時間的距離の近い「あした」、「きのう」よりも正答率が大幅に低くなった。このことから現在を中心に時間的距離の離れた言葉の理解は時間的距離の近い言葉の理解より遅れることが示された。また、「来週」「先週」のように言葉の示す時間的な範囲が広い「週」の概念理解を問う問題の正答率はより低くなった。前述したように1週間が何日かという問題の正答率は低く、この年代の幼児・児童は1週が7日間という循環性の理解には至っていないと考えられる。そのため先週、今週、来週という言葉の理解を問う問題の正答率も低いものになったと考えられる。

指定の日付の位置を尋ねたカレンダー課題k、lにおいては5歳児、6歳児ともに低い正答率となった。カレンダー課題kは9月のカレンダー上での8月31日の位置を、カレンダー課題lでは10月2日の位置を指さしてもらう課題である。カレンダーの規則は左から右にいくにつれて、上から下にいくにつれて日付が進んでいく。その他の日付を問う課題は数字を手がかりにして正答できるが、この2問は左上が早く右下に行くにつれて日付が進んでいくというカレンダー構造そのものの理解が必要だと考えられる。また9月1日の前日が8月31日で、9月30日の翌日が10月1日だという月と月のつながりと、月の最

後の日の翌日は再び1日に戻るという循環のルールを理解も求められる。この課題の正答率の低さから、この年齢の幼児、児童は数字を手がかりにカレンダーを使用しており、右から左、上から下に行くという日付が進んでいくというカレンダー構造や、前後の月との連続の仕組みの理解にまでは至っていない可能性が示唆される。

(3) 季節課題

季節課題では、季節に関する語の想起と、季節のイラストカードにもとづく季節名の呼称課題を行った。季節に関する語の想起では5歳児では夏、冬、春、秋の順で想起された語が多く、6歳児では冬、夏、秋、春の順で多かった。季節課題では「夏」「冬」のイメージの方が豊かであり、「春」「秋」のイメージの豊かさとは差があった。夏や冬のイメージに代表される暑さや寒さという身体感覚は幼児、児童にとってもイメージをもちやすい。また暑さや寒さは言語化しやすいが、「秋」「春」の気候は言語化が難しい点からもイメージの豊かさに差が生じたのではないかと考えられる。また、「季節の順序」問題の結果より5歳から6歳にかけて季節の順序を獲得することが多いと考えられる。この問題では「秋」を先頭に4つの季節を並び替えてもらった。課題実施中には秋からではなく春を先頭にして並び替えようとする様子が見受けられ、「春夏秋冬」の順で季節の順序を考えていることが示唆された。このような幼児、児童は「春夏秋冬」という順番を聞いたことがあり知っているが、季節の循環性についてはまだ理解していない可能性が考えられる。

(4) 年中行事課題

年中行事課題では、保護者アンケートによる行事間の生活経験の差は少なかった。クリスマスや七夕、節分のように5歳児、6歳児にとって参加でき、馴染み深い行事であることが課題の正答率に関連していると考えられる。また行事の時期や「年中行事の順序」の正答率が低いことから、経験から行事の内容は知っていても、その行事の時期までは理解していない幼児、児童が多く、この年代の幼児、児童には年という長い周期の理解が難しく、行事が1年のどの月のことなのかを理解することは難しいと考えられる。

今回の調査では、1週間が7日間というサイクルへの理解には至っていない幼児、児童が多かった。年は週よりもさらに長い周期をもつ概念である。1年は12カ月で再び新しい1年が始まることへの理解もこの年代の幼児、児童には難しいと考えられる。今後は1カ月、1年など長い周期をもつ慣用的時間概念の理解についても検討していきたい。

4. 2 課題間の相関

曜日課題の正答数とカレンダー課題の正答数との間、カレンダー課題の正答数と年中行事課題の正答数との間にそれぞれ有意な相関が認められた。このことから、曜日の理解や年中行事の理解はカレンダーの理解と関係していることが示唆される。今回はカレンダー課題でも日付の曜日を問う課題を設定している。カレンダーには曜日が記載されており、曜日の下に日付にあたる数字が並んでいるという構造になっている。日付を確認することで、その日の曜日も確認でき、1週間が終わると曜日も1周する、このカレンダー構造の理解は曜日の順序、循環性の理解に重要な要素であると考えられ、カレンダーの使用が曜日の順序性や循環性の理解につながる可能性がある。

また年中行事課題では、年中行事の時期を課題で取り扱っており、時期の理解については日付の概念の理解が必要である。カレンダーはその日の日付と曜日を知る手段として用いられており。実際に体験する年中行事と日付を知るためのカレンダーを理解することで、その年中行事がいつの時期に行われるものなのかを理解していく可能性が考えられる。

4. 3 課題の成績と保護者アンケートの結果との関連

子どもの言葉の使用合計とカレンダー課題の正答数との間に有意な相関が認められたことより、家庭でカレンダーに関する言葉を使用する子どもは、今回の課題でも正答率が高く、課題の成績は子どもの日常を反映しており、課題の妥当性を示している。

また、保護者アンケート間では家庭環境合計と子どもの言葉使用合計との間に有意な相関が認められていることより、保護者から子どもに対して曜日やカレンダーに関わる言葉の使用がある家庭ほど、子ども自身の曜日やカレンダーに関する言葉の使用が多いということが言える。子どもの言葉の使用には親や周りからの言葉がけが影響しており、本研究で取り扱った曜日やカレンダーに関わる言葉の使用についても、身近な大人である保護者から子どもへの言葉の使用が影響していると考えられる。また、アンケートの家庭環境合計と曜日課題の正答数との間にも有意な相関が認められたことから、家庭での曜日やカレンダーに関わる言葉の使用は、曜日の理解と関係していることも示唆される。家庭で言葉の使用は、子ども自身の言葉の使用だけではなく、曜日概念の理解面についても影響していると考えられる。

4. 4 今後の課題

今回の調査では対象人数が5歳児7名と6歳児8名

だったが今後は対象人数を増やし、また対象年齢を広げて実施することでより有効な調査結果が得られると考えられる。曜日課題やカレンダー課題を通して週の概念理解を深めたが、今後は対象年齢を広げて、これらの概念が獲得される年齢を検討していくことも必要である。また週よりも長い周期をもつ月や年などの慣用的時間概念の理解についても課題を作成し、理解を調査することで、見直しをもった学習や、子ども自身のスケジュール管理への指導に役立てることができると考える。

カレンダーについては保護者だけではなく、幼児、児童にとっても予定やスケジュールを共有したり、確認したりできるものである。この年代のカレンダー理解の知見は発達段階に合ったカレンダーの作成や使用方法への検討に繋がると考える。また、カレンダーという視覚的な手がかりを提示することで、1週間のサイクルや曜日の順序への理解、週、月、年の概念理解を促すことができると考えられる。こうしたカレンダーの活用方法を検討していくことが今後の課題である。

文 献

- 1) 小椋たみ子・線巻徹・稲葉太一：日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の開発と研究，ナカニシヤ出版，2016.
- 2) 竹内謙彰・丸山真名：美慣用的時間概念の発達，愛知教育大学研究報告，49，pp.103～107，2000.
- 3) 武藤隆：幼児における生活時間の構造，教育心理学研究，30（3），pp.185-191，1982.
- 4) Friedman, W.J.: The development of children's understanding of cyclic aspects of time. *Child Development*, 48, pp.1593-1599, 1977.
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領，2018.
- 6) 文部科学省：特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領，2018.